

日本大学の図書館の奥深さ

大 森 信（准教授 経営戦略論）

日本大学の図書館は、すごい。お世辞抜きに、すごい。本当に驚かされることがある。こんな本はまさかないだろうと思って検索をしてみたら、地下の書庫の奥に眠っていたことが少なくない。たとえ経済学部になくとも、他学部にはあったりして、取り寄せをお願いすると1週間もしないうちに手元に届く。

今年の初め、あるきっかけで、企業の躰（身を美しくすると書いて「しつけ」と読みます）の問題に注目し始めた。知識の教育やスキルのトレーニングではなく、それ以前の躰についての問題である。企業以外においても、家庭、学校、地域など社会全体で必要性が高まっている問題であるのかもしれない。企業内のこれまでの取り組みとともに、日本社会における躰についての文献を調べてみた。武家での躰、農家での躰、商家での躰、当然ながら古い文献が多い。日本大学にはそれがちゃんとあるのである。

たとえば杉本鉞子「武士の娘」『世界ノンフィクション全集 8』筑摩書房、1960年については、文理学部に所蔵されている。また徳岡秀雄「庶民家族におけるしつけ」『家と現代家族』培風館、1976年については、生物資源科学部ほかに所蔵されている。もちろん経済学部の図書館の中にもある。柳田國男編『民間傳承』は1946年の8月に発行された文献であり、民俗学の観点から農村の躰についての興味深い研究が展開されている。なお近江商人をはじめとする商家の躰についての詳細な文献は、未だ探し出せていない。ご存知の方はぜひご教示ください。

取り寄せた文献の中には、何年間もページが開けられることがなかったものも少なくない。場合によっては10年以上経ているものさえある。そんな文献を開ける時が感激的な瞬間である。10年前はどんな人が何の目的でこの文献を開いたのかな、まさか筆者は21世紀になって経営学者に読まれると思ってなかっただろうなんて想像しつつ、文献を開き、読み進めるのである。この感激は、実際に経験した人間にしか味わうことができない感激である。Googleの検索ではとても味わえるものでない。21世紀の現在、大いにインターネットは活用すべきである。しかしインターネットしか活用しないのは、片手落ちであるとも言える。逆にインターネットと、図書館の両方をフル活用できれば、現代人にとって鬼に金棒状態である。そのための環境がとてつもなく充実しているのが日本大学である。ぜひとも幸福な環境を4年間堪能して欲しい。